
ルシファー

蓮華永

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ルシファー

【NNコード】

N8372R

【作者名】

蓮華永

【あらすじ】

『死の天使』^{ルシファー}と呼ばれる少女が居た。

其の少女は皆に嫌われていた。故に、少女も皆を嫌つた。

だが、そんな少女に気さく話しかける存在が居た。

それは、全知全能である、『死の天使』^{ルシファー}を創った神である。

これは、『死の天使』^{ルシファー}と神の赦されない恋。

チャプター？

自分が嫌いだ。それ以上に自分を創った神が嫌いだ。

『死の天使』

ふざけた名前。冒流にも等しい名前だ。

ふわりと風に揺れる白金金髪。プラチナブロンド。其の容姿と髪は見目麗しいものだが、瞳は禍々しい血の様な紅色。

神の最高傑作として名高い『死の天使』。それが、彼女の名前。

創造主ゼウス

彼は創造し、天使を創りだす能力がある。

だが、プラスを創り続けるのは良くないと云い、ゼウスはマイナスを創りだした。

「それが……ルシファー…………」私

ぼそつと、呟く。

ルシファーは自分が嫌いだ。そして、それ以上に自分の親でもある主神ゼウスが嫌いだ。

一度だけ、造られたときに見た。

忌々しい。あの黒髪金眼の男。何時、殺そうか…………。

ルシファーは真剣に考えてしまう。

「あ、君は……」

突然、声を掛けられた。其の声の方向に、振り向けば、忌々しい嫌いな男が立っていた。

神殿に居るはずの男が何故？ と思ったが、ルシファーはにやりと晒つて、持ってきたクリスタルの鎌を振り上げた。

ドスッ

「危ないなー。俺が創ったにせよ、女の子がそんなものを持つてちや駄目でしょ？」

「ちつ。避けたな・・・・・・」

ルシファーは自分の身長よりも長い鎌を地面に叩き刺していた。それは実際目の前の男、ゼウスに刺さっているはずだった。舌打ちをし、それを地面から引き抜き、またゼウスを目掛けて振る。だが、それも避けられる。

ヒュンヒュンヒュンヒュンッ

何度も振り回したことだろう。だが、それは全部避けられてしまった。

「あれえ？ もう息切れかい？」

ゼウスは微笑みながら云う。ゼウスの云う通り、ルシファーは肩で息をしている。

「クス・・・・・・。可愛いね、流石俺の最高傑作だ・・・」

ゼウスはそう云うと、ルシファーの細い腕を掴んだ。

「ツ・・・・・！」

「髪、長くて可愛いのに、そのまま何て・・・勿体無いなー。あ、俺が結んであげよっか？」

陽気に話すゼウスに苛立ちを覚え、ルシファーは腕を掴まれたまま、吠えた。

「五月蠅いつ。此の手を離せ、ゼウスッ！－！」

だが、聞き入れてもらえない。

「君は本当に・・・可愛いなあ。流石天使・・・・・・」
一コリ、と笑って云うゼウス。

天使？ 自分がか？ フザケルナ。私は・・・・・・！

「ふざけるなッ！ 私は天使では無い。天使とは名ばかり！ や

つて いる仕事は死神と変わらないッ！」

そう叫ぶと、少しひのぞは眼を瞠つた。そして、「仕事……？」
と呟いて眉間に皺を寄せた。

もしや……知らないのか？　此の男は……私の仕事を。

「ねえ、ルシファー。君の仕事って、何？　俺は君には役目を授け
ていな いんだけど……？」

「ほう、全知全能である神、ゼウスが知らないとは……。
私の仕事は一つ。『穢れた魂の回収』、だ

「な、に・・・それ・・・・・・」

是は面白い。そう云いたそうにルシファーは晒つた。だが、其の
笑い方が気に入らない様子のゼウスは顔を顰めた。

「俺は、面白くないんだけど。大体、其の仕事は誰に云われてやっ
てるの？」

「お前の息子だ」

ゼウス黙つた、數十分位。その間も、ルシファーは面白そうに笑
つていた。

「太陽神・・・アポロンの事かい・・・・・？」

「そうだ。だが、実際はあいつもお前が創つた者だろ？」

「うん、そうだよ。だから、君も俺の娘みたいなものだけね……」

「ふん、虫酸が走る」

ルシファーは吐き捨てるように云つた。自分が此の男の娘だと考
えたくないのだろう。ゼウスは残念と云い、肩を竦めた。

「取り敢えず、俺がそんな事を止める様、云つておくよ」

「は？　厭よ。やりがいがあるもの。大体、あんた、権力行使して
んじやないわよ」

「・・・なんかさつき云つてた事と全然違う……」

「はあ？　何云つてんの。私は別に止めたいだなんて、云つてない

じゃない」

「……………」

とうとうゼウスは黙つた。本気で黙つた。

「黙るのはいいんだけど、此の手。いい加減離してくれない？」

「厭だ」

即答だった。今まで黙っていたのに。

「・・・・・そうだ。アポロンを殺そつ

「あんた何考へてんのよ！！」

いきなりの発想につい、突つ込むルシファー。ゼウスの表情は拗ねた子供様だつた。何故だかそう云う所は可愛いと思つてしまつた。「だつて、君にそんな残酷な仕事を与えるから・・・・・・」

「貴方の方が残酷よ」

それは、常日頃思つてゐること。

彼は、天使を創つても、自分で管理しない。それが、墮天使となり、消滅していくことも多々ある。それを回収するのがルシファーの仕事だ。

本当に残酷で美しいのは彼だろう。彼ほど残酷な者は居ないだろう。

「俺が・・・残酷、ねえ・・・・・」

「ヤニヤとゼウスは晒つ。面白そうな顔だ。」

「俺は創造主。何を創つて、何をどうするかは、こつちの勝手。そして、其れをダメにしてるのは人間の心だ」

「こ、ころ・・・・・・？」

聞き返せば、ゼウスは頷く。そして、話を続けた。

「天使の善悪は人間の心で決まる。対象となる人間の心が闇に染まれば、その天使も闇に染まり墮天使になる。そういうループなんだよ」

ふつと、微笑む。その微笑みは何か、寂しさを感じた。

「・・・貴方は・・・・・何故天使を創るの・・・？ プラスを創り続ければ、私の様なマイナスがまた必要となるじゃない・・・・・

・・・

そう云えば、ゼウスは少し眼を見開き、笑った。

「君は・・・優しいんだね・・・・・・・・」

「・・・ツー？ フザケナイで！！ 私が優しいツー？」

あんたの
脳腐つてんじやないツー！！？」

「物凄い云われようだなー」

ケラケラと、陽気に云つ。

「いっ・・・・！ 調子が狂うツ

「ゼウスツ、こんな所に居たのか・・・・！？ つて、ルシファー・・・
お前、ゼウスと何故一緒に居る・・・・・・？」
「捕まつたの。それで、チャンスだと思つて斬りかかつたら、こう
なつた」

正直に云つと、アポロンの尻尾が釣り上つた。

「斬りかかつた・・・？ お前、ゼウスにか・・・・？」

「ええ、それ以外に誰が居ると云つのよ」

ルシファーは挑発をし、悪辣に笑う。此の男はゼウスを敬愛して
おり、ゼウスに害をなす者を赦さない。其れを判つていての言葉だ。
「貴様、万死に値するぞ・・・ツー！」
「殺したいなら殺せばいいわ。私は別に死んでも構わないし
「ツー？」

ルシファーの発言に驚くゼウス。何故？ と思ったがどうでもいい。
い。

アポロンが剣を振りかざす。

キンツ

金属同士が擦り合つ音が耳に響く。

「・・・は・・・・・？」

「ゼ、ウス・・・・・？」

アポロンの剣を受け止めたのはゼウスだった。瞬間に剣を創りだしたのだ。

「そうやって・・・無意味に剣を振りかざすのは、よくないなー・・。ね、アポロン」

ニッコリと笑うが、眼は笑っていなかつた。ルシファーは少し恐ろしいと思つた。

一方アポロンは、ゼウスに對して剣先を向けてしまつたことに、罪悪感、自己嫌惡に陥つてゐるようだ。それほどにゼウスを尊敬しているのだろう。

「済み、ません・・・済みませんゼウスッ！　お怪我は！？　大丈夫ですか！？」

「大丈夫。取り敢えず、ルシファー此の子は俺のお気に入りだから、何もしない事」

ゼウスは先ほどより楽しそう笑いながら云つ。アポロンは少しルシファーを睨んでから返事をした。

「いい気味・・・！」

ぼそっと呟くルシファー。それは勿論アポロンには届いていない。が、ゼウスには届いていた。それを知らずにルシファーは悪辣に笑う。

「失礼します、ゼウス・・・・・・」

去る時にも、アポロンはルシファーを睨んでいた。

アポロンが去つた後、ゼウスはルシファーに振り返つた。其の瞳は、少し怒つている。

「・・・何？　私、この後仕事があるんだけど・・・・・・・・・・・・」

「君は・・・死にたいの？」

質問をしてきた。そして、それにルシファーは眼を瞠つた。さつきの発言の事か。

「ええ、死にたいわ。だって、生きてる意味がないもの・・・生きている、意味を、感覺を、見いだせない・・・・・・・・・・・・」

少し、悲しげに眼を伏せる。

「じゃあ、探そう」

楽しげな、ゼウスの声。その言葉に、ルシファーは顔を上げる。

その微笑みに、少し胸が高鳴る。

「君の、存在意義を・・・生きている意味を・・・・・俺と、共に・・・・・」

すつと、ゼウスが手を差し出す。戸惑いながらも、ルシファーはその手をとった。

これは、神と天使の赦されない、短い恋の話。

チャプター？（後書き）

長くて済みません。
ですが、是、多分次ぐらいに終わる短編みたいなものなんですよね
！。

チャプター？

「ねーえ、ルシファー！ 仕事、本当にに行くのー？」

ゼウスが声を上げる。ゼウスの前方には大鎌を持ったルシファー
が居る。最初は其の声に無視していたが、そろそろ堪忍袋の緒が切
れそうになつてゐる。

• • • • • • • • • •

「ねー、ルシファーッ。聞こえてるんでしょー?」「う、うひゃーつあ!!!!!!」

ルシファーはとうとうキレ、大鎌を振る。

「おつと・・・！ 危ないなー、当たつたらどうするのや・・・。」

また振るが、やはり当たらぬ。

「それ以上無駄口呂くな！」
「して」
「なして」
「ハセ」
「たしのよー」

片手をあ

アーニーはまた歩き出す。

今ルシファー達が歩いているところは、天界のスラム街にあたる場所だ。まさか、此処に出向くことになるとは、流石のゼウスも思わなかつた。

此処は・・・負の感情が交差しているな・・・・・。」
「ううでルシファーが働いているなんて・・・・・！」

ゼウスは目の前を歩く少女を見る。綺麗な白金金髪がルシファー
が動くたびに揺れる。

「ねえ」

「刺すわよ？」

「その髪、仕事したときに、返り血とか浴びないの？ 僕達にも血はある訳だし」

「浴びるわよ、そりゃあね。それより、刺すわよ？」
「これ以上喋らないから」

「……………」「ン」

一人はまた黙る。

あの髪が、紅色に染まるのか…………見たくないな…………。

そういえば、ルシファーは綺麗な純白の服を着ている。それも、血に染まるのだろうか？

「髪は…………後ろを向いたときに、付くの。だから…………・服に付く事は、無い」

「後ろ？」

つい、聞き返す。だが、ルシファーはそのまま続けた。

「そう、斬つてすぐは、綺麗に斬るから、すぐには血は吹き出ないの、だけど、首が落ちたら、血が出るから…………それが付いたりするの」

ぽつりぽつりとだが、ルシファーはそれを云い、すぐにまた黙つた。だが、ゼウスは嬉しかった。少しだが、ルシファーが自分の事を云つてくれた事に。

黙々と歩いていくと、ルシファーがピタッと止まった。

「？ 此処…………？」

返答する事無く、ルシファーはまた歩き出し、途中の曲がり角をまがり、一つの牢屋の前に来た。

「…………肅清に来た。墮天使は出て來い」

そう、静かに云うと、一人がふらりと牢を開けて出てきた。
「ゼウ、ス…………様…………？ 何故、このような…………」

？」

「ん？ ちゃんと自我があるんだ・・・・・・、へえー」

感心したように頷くゼウス。少し其の瞳が楽しそうである。

「ゼウス、少し下がつていろ。返り血を浴びるぞ」

ぐい、と腕でゼウスを後方に避けてから、ルシファーは鎌を持ち直し、墮天使と向きなおす。

「安らかに、お眠り下さい・・・・・・」

ぼそっと、祈りを捧げ、ルシファーは鎌を振り上げた。

ザシユツ

ぐるりと、ルシファーは後ろを振り向く。その時、一気に血が噴き出した。

ビチャビチャツ

案の定、ルシファーの髪には大量の血が付いた。

「ゼウス、終わつたわ。帰るわよ」

「・・・・・・・・・・」

返事が無いのを、訝しげに思い、ルシファーはゼウスの顔をのぞく。

く。

あ、涙目・・・・。

ふと、ルシファーの瞳に涙がたまっているのを見つけたゼウス。

「泣きたいなら・・・・・・」

ぴく、とルシファーが反応する。

「泣きたいなら・・・・泣いていいんだよ・・・・・・？」 ルシファ

ー

「は？ 何云つてんのよ・・・・？ 泣く？ 私は一度も・・・・・

「

途中で言葉が切れる。ほろりほろりと、一筋の涙が流れる。

「怖いのよ・・・呪われし魂の・・・私が、墮天使を裁くと云うのが・・・・・・！ 何で？ 本当に裁かれるのは、私よッ！ だから、祈りを捧げるの・・・・・最後に」

安らかに、永遠の安寧が護られるよう

其のまま、ルシファーは大声を出して泣きだした。

「・・・・・・ 小さい・・・・・」

ルシファーは余りにも、小さい。震える小さな肢体をゼウスは力任せに抱きしめる。

「ルシファー・・・・・・ キミは・・・・・」

どうして、そんなに耐えられるの？

其処までして、何故耐える。耐える必要があるのか。

「そんな・・・重荷を背負つて、君にメリットが有るのか・・・・・？」

こんなにも、耐えて、堪えて、溜め込んで、背負い込んで。それをする必要は、有るのか？

「ねえ、ルシファー・・・・・・・・」

君を、愛しく思つるのは、変なことかな

？

其のまま、ゼウスは天を仰いだ。

ああ、陽は見えないのか

。

「ねーえ、ルシファー？ 何いじけてんのー？」

「いじけてないわよ！ 嘘んじゃないわよッ！」

「にまにまと笑いながら問えば、ルシファーは顔を紅くしながら吠えてきた。

さつき、俺に泣き顔を見られたからかな・・・？ たのしー！！

ルシファーの瞳は元が紅色だから目立たないが、まじまじと見れば白眼が赤くなっているのが判る。

「眼

ビクッ

過剰反応してしまい、少しうつむいたえるルシファー。

「後で、冷やして、温めよづね」

「……………！ 結構よッ！」

ルシファーは吠えてすぐに、背中から何かを出した。

それは、鮮やかな淡い紅色の翼。ルシファーの白金金髪ブランチナブロンドによく映える。

「綺麗……」

「私ツ、先に帰るからツツ！」

「あ

「ぱさ、と音を立てて、ルシファーは天へと舞いあがり、飛んでいく。

「まつたく

薄く苦笑しながら、ゼウスは瞳を閉じ、前のめりになる。すると、

淡い碧色の翼が生えてくる。羽根の数は片方ずつに3枚で、計6枚。「久しぶりにだしたな、これ・・・・」

実際は邪魔でならない。だから翼をもつてている者は普段は隠して

いる。

音をたてながら、ゼウスはルシファーの後を追う。

「つと。さて、何処に行つたかなー？」

着地してすぐに、ゼウスは笑いながらルシファーを探す。

「？ ゼウス様？ 何故、此処に・・・・・？」

声を掛けられた。声でそれがルシファーじゃ無いことが判る。ゼウスは冷静に振り返り、相手を見た。

「アルテミス、久しぶり。ちょーっと、お出かけしてたんだ」

ニッコリと笑つて云えば、アルテミスは眉をひそめる。

「・・・主神しての仕事はしているのですか・・・・・？」

「ほっぽり出してきた」

「・・・・・・・・・・・・」

またニッコリ笑つて云えば、今度は眉間の皺が増えた。

「いい加減に・・・してくれませんか？ ゼウス様・・・・・！」

「俺は俺のやるべきことをしている。お前等如きに制限されるいわ
れは無い」

冷たく言い放てば、アルテミスは黙りこむ。少し苛々しながらゼウスはまたルシファーを探し出す。

「アルテミス、ルシファーを見つけたら、云つて、白金金髪の女の

子ね」

「・・・『ルシファー』死の天使・・・・・？ 何故？」

「口答えは赦さない。云つ通りにしなさい」

再び冷たく云えば、アルテミスは黙つて跪いた。

「御意に、我が主」

ゼウスはそれを尻目に見て、歩き出した。

「

微かにだが、歌声が聴こえてきた。

「・・・？ 歌・・・・・・？ 何処から？」

耳を頼りにその歌声が響いてくる方へ行く。

近付くと、歌がはつきり聴こえるようになつてきだ。

アヴェ マリア わが君 野の果てに嘆かう 乙女が祈りを あ
われと聞かせたまえ みもとに安らげく眠らしたまえ・・・

「？ アヴェ・マリア・・・・・・・？」

風が突然吹き荒れる。

「 ッ・・・・・・・！」

真正面を見れば、其処には出てきた陽の光に照らされ、唄う一人
の天使が居た。

「ルシファー・・・・・・・」

その姿は、天の申し子の如く、輝かしい天使。紅色の翼を広げ、
唄う。

「君は・・・・・」

『死の天使』なんかじゃ無い。

君は

『光の天使』だ
。

チャプター？

氣付いたら、すぐ傍にゼウスが立っていて、ルシファーは吃驚した。

「な・・・・・！ 居たんなら声を掛けなさいよッ。驚いたじやないッ！」

き、聞かれた・・・・・ツ！

恥で顔が赤くなる。今の今まで、歌を聴かれたことは無かつた。
「綺麗、だな・・・・・ルシファー。君は、君の何処が、『死の天使』なんだい？ とても・・・綺麗じゃないか・・・・・」
そう云つて、ゼウスは愛おしげにルシファーの髪を梳く。びくり、とルシファーは肩を震わせ、その手を受け入れた。

どうして・・・安らぐんだろう・・・・・。

じつして、ゼウスに触られていると、落ち着く。今までの、醜い気持ちが、感情が和らいでいく。

「・・・・・・・・・

ルシファーは顔をあげ、ゼウスを見つめる。
すつと、手を伸ばし、ゼウスの髪に触れる。そのとき

。

「その手を離せッ、『死の天使』ッ」

誰かの叫び声が、響く。それは、アポロンの声だ。
「ゼウス、その物から離れる。そいつは、『咎人』だ」

「つー？ はあ！？」

ゼウスは素つ頓狂な声をあげるが、当のルシファーは溜息を吐き、ゼウスから離れた。

「だらうと……思ったわ。私が、貴方の傍に居ていればないもの」

「ルシファー？」

呼びかけるが、それを無視して、ルシファーはアポロンに近付く。私なんかが、ゼウスの傍に居れるわけがないわよ……それは、当たり前のこと……。

ふつと、淡く、微笑み、ルシファーはゼウスを振りかえる。

「たつた・・・・・・たつた、2日だけだつたけど・・・・・・私、貴方を知れて、よかつた」

「ルシファー？ それは、どういう・・・・・・」
意味？ と聞く前に、ルシファーは云つ。

「愛しいと、思つた。貴方の事を、好きに、なつた・・・・・・これは、赦されないの。不敬罪よ。その前に、私なんかが、貴方の傍に居ては、いけない」

ゼウスは目を瞠る。ルシファーの笑顔を、初めて見た。それは、誰よりも美しかった。

「さよなら、ゼウス・・・・・・愛して、いたかつた・・・・もう少し、落ち着いて、云いたかつた・・・・・・」

それと同時に、アポロンは浄化を司る剣、《冰翠》^{ひょうすい}を振りかざし、ルシファーを斬つた。

「つ・・・・、ルシファ

「！」

最後の叫びに、ルシファーは微笑んで、消えて逝った。

ルシ、フア・・・・

どうして、君は、そんなにも勝手なんだ。
け云つて、俺の傍から離れてしまうんだ。

「俺の気持ちも、伝えさせて、くれよ…………」

ルシファー、俺は、君を、好きになった。そして、もう一度と、
創造しないと、誓う。

あれから、幾歳の月日が流れた。

ゼウスは、この永遠に等しい日々を、ただ果然と過ごしていった。

川之言

時折、何かを呟いては、また黙る。

風が、吹く。

はつと、空を駆け、立ちあがる。

「 目の前には、淡い光に包まれたルシファーが立つてゐる。
　ルシファー・・・！ ルシファー、居たん、だね・・・・・・
　最後は、涙で滲む。それでも、ルシファーは笑つてゐる。」

ゼウス、御免なさい、貴方を一人にしてしまつて……。
でも、私は、ずっと貴方の傍に居るから……。

泣かないで、トルシファーは云う。だが、それは無理だ。最愛の君を失くし、泣かない方可笑しい。

「ルシファー、逝かないで。俺の、傍から離れないで懇願するが、ルシファーは首を横に振る。

「

無理よ、私は、魂しかない。身体は浄化されてしまったから、ここには、長時間留まって居られないの

「じゃ、あ・・・形代を、創るから・・・！」だから、俺の傍から・
・・・・・

だけど、云い終わる前に、ルシファーは消えた。

手を伸ばしても、声を張り上げても、届かない。

だけど、この気持ちはずっと、お互いの胸の中に、在る、存在しつづける。

だから、泣かないで、私の愛しい人

。

fin.

後書き

ルシファー、完結です。中途半端ですが、完結です。

これまで、『J愛読していただいた方に、有難うの気持ちを込めて
。』

これで無事に完結した作品は、2作目となります。

ですが、2作とも、どちらも悲恋なため、どちらも、報われてないと言つ・・・。
ま、気にしません、ですから、気にしないでください。

次に、余裕がありましたら、また新作をやりたいと思つてこるのでですが、まだ設定が上手くいっていないので・・・。頑張ります。

それでは、短いですが、終わります。

2011年 4月 21日

蓮華 永

拝

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8372r/>

ルシファー

2011年5月17日06時59分発行